

## 古代文学研究再考

——「言葉とは何か」について学びながら——

横倉 長恒

はじめに

古代文学を考える時、言葉とは何かについて学んで置くのは無意味ではない。「言語にとって美とはなにか」に於ける言語発生についての考察は、学に志して最初に出会ったものだっただけに、私にとってはちょうど動物世界に於ける「刷り込み」のように、その真価について理解できているのかどうかということを超えて、大変重要なものとして存在する。そこで吉本隆明の「言語にとって美とはなにか」の「言語の本質」に学ぶことから始めたい。この作業を通して見えてくる問題が実に大きく見えて来るからである。

一 「1 発生の機構」から学ぶ

吉本隆明はその著書『言語にとって美とはなにか』第1章で、言語学者とは異なった「言語の像を駆使した経験」の所有者の立場から、「言語の本質」を考察している。「言語の解剖理論が最終の目的」の「言語学者」に対して、「言語の表現理論が最終の目

的」の「言語の像を駆使した経験」の所有者を区別したこの在り様は、少なくとも言語学者によってなされるもの以上の刺激を与えて、鋭く対象に迫る或る種の迫力を感じさせる。

吉本隆明は「言語の像と理論とをふたつともつかむことができずである」と考察の対象をも示す。

彼は「言語哲学ともいべきものの多様さ」を見ながらも、問題への「深入り」を避け、しかし「言語を機能としてあつかうわけにもいかない」として考察に入る。

記憶に在るところを辿れば、吉本は別の論考で、文学の機能論の限界を知って、独自の論を展開し始めたことを認めていたはずだ。吉本隆明が『言語にとって美とはなにか』を書き始めたころは、戦後のこととして文学の果たすべきことが盛んに論じられていた。それは戦争責任論とマルクス主義文学理論に関わるものであったと私は捉えて居たが、文学を機能の面から見ることが大切だが、それだけに関わって居ては大切な何かを見失ってしまう。

吉本隆明は当時の文学評論世界の在り様に愛想を尽かし、文学を根本から問おうとし、僅かの読者に支えられる中で、その仕事を遂行したのである。

吉本隆明は、文学の発生が解ればそれに付随することは自ずと明らかになると考えたようだ。確かに発生のメカニズムを知ることができれば、機能は自ずと分かってくると思えることもできる。そこで、「人間だけが言語をもつという考え方は、人間のある本質力と言語とのあいだにひとつの関係があるという見解を暗示していること」と、「人間以外の動物も言語をもっているが、発達した言語をもつのは人間だけだという考え方は、人間が人間に近似した動物から、進化した集団と労働の様式をもつようになったとき、社会的交通の手段として言語も進化した様式をもつにいたったのだという見解を暗示していること」の違いを示しながら、「『ここには、何らかの意味で言語の発達を社会的交通の進化にむすびつける立場がふくまれている』と指摘し、「言語学者たちが言語発生の機構をとりあげるとき、大別してこのいずれかにかたむくようにおもわれる」ことと、その傾きも「未開人種の言語観察、類人猿の生活の観察、幼児の成長過程と言語の関係の観察などから、言語学者の結論しているところは、決め手をあげられないまま」のものであることを分析している。その上で、「言語の実用説がまちがいであること」を主張した、S・K・ランガー』シンボルの哲学』を取り上げ、ランガーが「アヴェロンの蛮人ヴィクターを研究し、教育したイタールという医師の報告」を挙げて説明しているところを取り上げながら、「言語発生を非実用的に非実用的にとかんがえようとする特徴が鋭くあらわれている」その特徴を捉え、ランガーの考え方を次のようにまとめ、コメントしている。

まず、無言語の原始人が、特定の好適な社会・自然条件にめぐまれて祭式や夢や迷信のようなシンボル化のつよい傾向をもつようになり、祭式のような集団行動のなかで、高低強弱の声をえらびはじめ、その場面をはなれたあとも象徴的な音声としての機能をもつことになり、つぎには、自発的に特定の対象と結び付けられ対他の機能をもつにいたって言語となる。

ランガーがえがいているこういう一連の経路は、原始的な音声自己抽出されて言語として形成されたという一方のかんがえを代表するものとみなすことができる。原始的な音声は、いわば個々の感情的な体験を生理的感覚の機能にしずめこむとともに、共通の感情的な体験を、個々の祭式や集団行動の場面から抽出して象徴と表示に転化させる。こういう見地から言語発生の機構をみることは、人間の意識の自発的な表出の過程として言語の成立をみることを意味しており、意識の実用化の過程として言語をみることにまったく位相がちがうことに注目しなければならぬ。(一五―一六頁)

吉本は続いて、「ランガーの見解と一見対照的なところに、たとえば『ドイツ・イデオロギー』の言葉が位置しているように見える」と、慎重に言葉を選びながら次の引用をする。

『精神』は元来物質に『憑かれ』てゐるといふ呪はれたる運命を担つてゐる。現に今、物質は、運動する空気層として、音といふ形をとつて、要するに言語の形をとつて現はれる。言語は意識とその起源の時を同化する。――言語とは他人にとつても私自身にとつても存在するところの実践的な現実的な意識であり、また、意識と同じく、他人との交通の欲望及び必要から

発生したものである。一個の關係が存在するという場合、それは私にとって存在する。ところが動物は何物に対しても『關係』しないし、一体、關係といふものを持たないのである。動物が他のものに対する關係は、動物にとつては關係として存在するのではない。故に意識は、元來一種の社会的産物であり、そしてこのことは、一般に人間が存在する限り変らない。言ふまでもなく意識は最初は、最も手近かな感性的な環境に就ての意識にすぎず、意識化しつつある個人の外部に横はる他人や事物とのごく局限された關係の意識たるにすぎない。それは同時に自然に就ての意識である。(一六頁)

吉本はここでマルクスと「通俗マルクス主義者」を峻別し、スターリンはマルクス主義者として「言語実用説、道具説をみちびきだす歴史的誤解を堆積し流布した」とし、「他人にとつても私自身にとつても存在するところの実践的な現実的意識」(他人々にとつて存在するとともに、そのことによってはじめて私自身にとつてもまた実際に存在するところの現実的意識)というような、捨てるに惜しい微妙な言いまわしを投げすて、言語は人間の交際の手段として奉仕するために存在し、創造された「改ざん」したと批判する。吉本の指摘を現在読み返す時、スターリンの名前が複雑に響く。勿論ソビエト連邦の消滅、東欧諸国の在り様を考えてである。人間を解放するはずの「マルクス・レーニン主義」が、それからの解放を叫ばれるほどの状況を招いてしまったのは、「通俗マルクス主義者」の、変化を見れない、頑迷さと、独裁者に媚びへつらう官僚層と、現状を絶対と考えてしまう為政者に主な理由があったようだ。吉本はその辺を見通していたなどと俗なことは言うまい。しかし我々は「社会主義が敗れ、資本主

義が勝った」などと他愛のないことを言つて、マルクスと通俗マルクス主義者をごっちゃにして葬る前に、もう一度マルクスの考へに戻つてみても良いのではないかと考える。吉本は既に立ち返つていた。彼は上記の「意識」に注目して次のように解説する。

かれが〈意識〉とここでいうとき、自己に對象的になつた人間の意識をもんだいにしており、〈実践的〉というとき、〈外化〉された意識を意味している。このような限定のもつて、外化された現実的意識としての「言語」は、自己にとつて人間の對象的になり、それゆゑに現実的人間との關係の意識、いわば對他意識の外化である。(一七頁)

吉本はランガーとマルクスの違いを、「他人との交通の欲望及び必要から発生したものである」所に見て、更にそれは「〈自己自身との交通の欲望及び必要から発生した〉と言いかえても一向さしつかえない〈外化〉の概念としてこれをつかっている」と指摘する。

続いてブイコフスキーの『ソヴェト言語学』を取り上げ、彼の引用している「フォイエルバッハ論」から、「人間は、現実的意識としての音声表出を、人間的な意識の自己表出として行うようになったとき、はじめて自分を動物と区別しはじめた」ことを導き出せると言う。そうして言語発生機構の経路を次のように想定する。

はじめに、無言語原始人が、動物社会よりも高次な生産關係をもつ高次な共同社会をいとなむようになったとき、甲が乙を労働にさせたり、共通の利害に呼応したり、男女がともめあ

ったりする叫びごえの音声も、高次な網目をもつようになり、そのため器官への固定作用が高度になって、特定の有節音が、特定の信号としての機能をもち、ついに共同社会の約定のようなものとして特定の音が特定の事物を指示するものとしてあらわれた、とかんがえるのである。(一九一〇頁)

その上でブイコフスキーの引用したエンゲルスの「猿の人類化への労働の関与」の一節を取り上げて、それを「エンゲルスが言語の起源についてのべたもつともままとまった個処である」と評価し、ブイコフスキーが言語の労働起源説を導き出そうとしたのを批判している。

手の発達、労働とともに開始された自然の支配は、新しい進歩がなされるたびに、人類の視野を拡大した。人類は、自然物において、ひきつづいて、新しい従来不知の特質を発見した。他方、労働の発達は、必然的に、相互扶助、共同的な協力の場合を増加せしめこの協力の有用なることの自覚を各個人に明ならしむることによつて社会成員を相互に近接せしむることに貢献した。概言すれば、成立しつづありし人類は、相互に何事かを言はなくてはならぬまになつた。かゝる欲望はそれのための機関をつくつた。猿の未発達の喉頭は、つねにより発達せる抑揚をなさんとする抑揚法によつて徐々にしかし着々と変化し、口腔の機関は、漸次、明確に発音せらるる文字(Beystaben)を次から次へと話すことを覚へるに至つた。(二〇頁)

吉本はこの中の「何事かを言はなくてはならぬまになつた」に注目し、このことは「人間が人間的な意識の自己表出の欲求を

もつようになったということの意味している」と言う。そうしてブイコフスキーの区別しなかつた「労働の発達が言語の発生をうながした」と「うながされて言語を人間が自発的に発すること」を峻別し、この間に「千里の徑庭」のあることを指摘して次のように言う。

この人間が何ごとかを言わねばならぬまでにいたつた現実的な事件と、その事件にうながされて自発的に言語を表出することとのあいだに存在する千里の徑庭を言語の自己表出(Selbstausdrückung)として想定することができる。自己表出は現実的な事件にうながされた現実的な意識の体験が累積して、もはや意識の内部に幻想の可能性として想定できるにいたつたもので、これが人間の言語の現実離脱の水準をきめるとともに、ある時代の言語の水準の上昇度をしめす尺度となることができる。言語はこのように対象にたいする指示と対象にたいする意識の自動的水準の表出という二重性として言語本質をなしている。(二二頁)

吉本はここまで述べて、言語の発生についてこれまでなされて来た議論について整理し、「遊戯や祭式の行動をもとにして言語の発生をかんがえる」説と「労働や交通の用具として言語の発生をかんがえる」説とを大別しながら、それぞれが「実用性と自発的な表出のいずれかを切りとり、その断面を拡張して、ついに対照的な彼岸に到達していること」の問題点を指摘している。

吉本はこの問題は、言語学者が「はつきりした実証的な根拠をあたえ」ても「この二様の説のいずれかに軍配があがるというようには、問題は所在してないとみるべきである」と捉え、次のよ

うに言語の発生機構をまとめている。

エンゲルスのいうように労働の発達は、相互扶助、共同的な協力の場合を増加させ、社会の成員を相互にちかづかせるようになる。この段階では、社会構成の網目はいたるところで高度になり複雑化する。これは人類にある意識的なしこりをあたえ、このしこりがある密度をもつようになるとやがて共通の意識符牒を抽出させるようになり、有節音が自己表出 (selbständig drucken) されることになる。人間的意識の自己表出は、そのまま自己意識への反作用であり、それはまた他の人間との人間的意識の関係づけである。

言語は、動物的な段階では現実的な反射であり、その反射がしだいに意識のさわりを含むようになり、それが発達して自己表出として指示性をもつようになったとき、はじめて言語とよばれるべき条件を獲取した。この状態は、「生存のために自分に必要な手段を生産」する段階におおざっぱに対応している。言語が現実的な反射であったとき、人類はどんな人間的意識ももつことがなかった。やや高度になった段階でこの現実的な反射において、人間はさわりのようなものを感じ、やがて意識的にこの現実的な反射が自己表出されるようになって、はじめて言語はそれを発した人間のために存在し、また他のためにも存在することとなった。

たとえば狩獵人が、ある日はじめて海岸に迷いでて、ひろびろと青い海をみたとする。人間の意識が現実的な反射の段階にあったとしたら、海が視覚に反映したときある叫びをへうへうならへうへうと発するはずである。また、さわりの段階にあるとすれば、海が視覚に映ったとき意識はあるさわりをおぼえへうへう

らへうへう」という有節音を発するだろう。このときへうへうという有節音は海を器官が視覚的に反映したことにたいする反映的な指示音声であるが、この指示音声のなかに意識のさわりがこめられることになる。また狩獵人が自己表出のできる意識を獲得しているとするればへうへう」という有節音は自己表出として発せられて、眼前の海を直接的にはなく、象徴的 (記号的) に指示することとなる。このとき、へうへう」という有節音は言語としての条件を完全にそなえることになる。

こういう言語としての最小の条件をもったとき、有節音はそれを発したものととって、自己をふくみながら自己にたいする存在となりそのことによって他にたいする存在となる。反対に、他のための存在であることによって自己にたいする存在となり、それは自己自体をはらむといってもよい。

なぜならば、他のための存在という面で言語の本質が拡張されることによって交通の手段、生活のための語り言葉や記号論理は発達してきたし、自己にたいする存在という面で言語の本質を拡張したとき言語の芸術 (文学) が発生したからである。

このいずれのばあいも言語が本質としてはたらくかぎり即自をも対他をもふくんでいる。(二二—二四頁)

以上「言語発生の機構」から重要と思われることをピックアップした。吉本は第章V「3発生の機構」(詩の発生)で、再びハリンソンの『古代芸術と祭式』に言及し、「芸術の発生」に関し、「自然発生的な行為、または自然にたいする対象化の行為がくりかえされているうちに、しだいに行為自体が、一般化された形で抽出され、これが当の対象化行為の後に、記念として再演されるばかりでなく、ついには、当の行為の前に、まじないとして再演

されるところを指摘している点」を「文句のない正確さをしめしている」と評価して取り上げる。次にジョージ・トムソンの『ギリシャ古代社会研究』を取り上げ、その「労働発生論」的側面を捉え、トムソンの考察にはハリソンの考えたことは欠落しているが、「ハリソンの無視した機軸」、「芸術的行為が、原始的社会では自然にたいする人間の対象化運動なしには成りたないという機軸」を導き出していると評価する。しかしいづれも芸術の起源を語るとき、〈葬祭式〉(ハリソン)・〈労働〉(トムソン)という具体例に固執し過ぎると言い、「具体的な生活過程から、芸術がひきだされてくる共通の要因とはなにか、それはどのような普遍的な法則にむすびついているか」を問うことの重要さを指摘する。この問題は、「言語の発生について以前つきあたったときとまったくおなじである」と指摘しているところとともに取り上げたい。

## 二 「2 進化の特性」から学ぶ

吉本は「言語発生の機軸」の混乱は、「それぞれの言語観のための個性的なちがいをこえた何かをふくんでいた」ことに基づくと言う。それに対して「言語進化の過程」の諸説は、「哲学のちがいが、解釈の相違がよこたわっているにすぎないようにみえる」と言う。彼は、カッシラアの『言語』の「三段階」論を取り上げ、「言語が現実から離れてゆく過程を」へ擬態的、類推的、象徴的」と名づけているとして、それぞれの解説をし、「言語の進化について法則性をみつけないことばできない」という理由から、カッシラアの考への「当否を実証的にたしかめることはむづかしい」としながら、「けっして無意味でもないし、架空でもないことは手易く理解することができる」と評価する。

また「もっと確実にあつづける」ためには、「ある原理のほうへ身をよせて、その移行をかんがえるほうがたしか」だとして、マリノウスキーの「原始言語における意味の問題」を取り上げ、「初期言語の象徴・指示・指示物の関係の変化過程」を紹介している。

第一段階において、表出が単なる音声反応で、表現的で、有意義で、場と相関してはいるが、思考活動を含まない時には、三角形はただ底辺だけになって、それは真の結合——音声反応と場との結合——を表す。前者はまだ象徴とはいえないし、後者も指示物とはいえない。

### 第一段階

場  
(直接に結合する)

音声反応

分節的な言語の発端において、その出現とともに指示物が場から遊離し始める時には、その言語はまだ事実上の相関関係を表す実線一本で表示されねばならない(第二段階)。音声はまだ、象徴ではない、というわけは、それはその指示物から引き離して用いられていないからである。

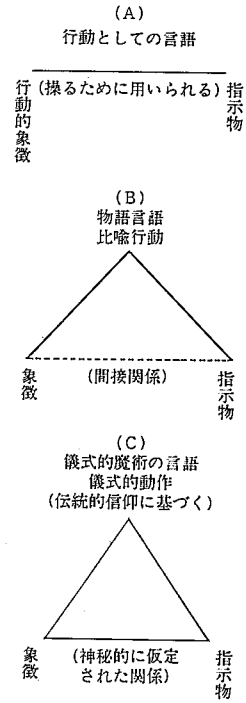
指示物

### 第二段階

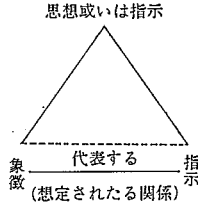
(相関する)

行動的音声

第三段階では言語の三大基本用法、すなわち、行動的、物語的及び儀式的用法を区別せねばならない。



発達せる言語の最後の段階はオグデン・リチャーズ両氏の三角形で表される。

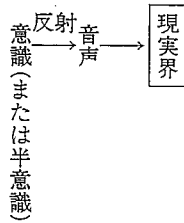


言語構造は、子供や、原始人、すなわち自然人の周囲の世界に対する実際の態度に起源する事実範疇を反映する。(二七―二九頁)

ここで吉本は、「カッシラアが擬声的、類推的、象徴的といふ三段階は、マリノウスキーの象徴、指示、指示物の関係がオグデン・リチャーズの三角形としてなりたつてゆく過程とおきかえることができる」と指摘し、吉本自身の考えも合わせ、それぞれのそれを説明しながら、「言語の本質は、マリノウスキーの

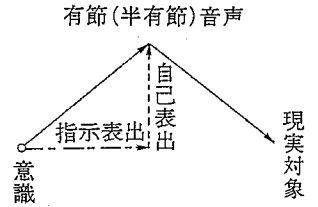
いうように、行動としての言語と儀式、物語としての言語にわけられるのではなく、ただ指示表出の面を拡大するか、自己表出の面を拡大するかによって、行動としての言語、祭式または物語としての言語があらわれることになるのだ」と言う。そうして、「言語が人間の意識の指示表出であることによって自己表出であるか、自己表出(対自)であることによって指示表出(対他)としてあらわれるものとして、その発達の段階を原理的にかんがえてみなければならぬ」と、吉本自身の考察を始める。

(1) 無言語原始人の音声段階で、音声は現実界から特定の対象を意識することができず、ばくぜんと反射的に労働、危機、快感、恐怖、呼応などの叫び声を発するものとする。この段階では、人間の現実にたいする言語的な関係はつぎのようにしめされる。



音声は現実界(自然)をまっすぐに指示し、その音声のなかにまだ意識とはよびえないさまざまな原感情がふくまれることになる。

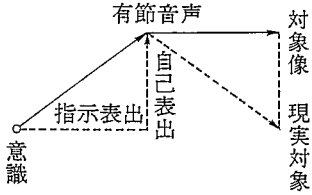
(2) 音声が生きたいに意識の自己表出として発せられるようになり、それとともに現実界におこる特定の対象にたいして働きかけをその場で指示するとともに、指示されたものの象徴としての機能をもつようになる段階である。(第一回参照)



第1図

ここで現実対象というのは、図式化のためにやむをえずそう呼んだが、かならずしも原始林の木の実だとか、海だとか、獲物だとかを意味するだけではなく、祭式や儀式であってもまた合図であってもさしつかえない。ここではじめて現実界は立体的な意識過程にみだされるのである。この自己表出性がうまれるとともに、有節(半有節)音声は、たんに眼前にある特定の対象をその場で指示するのではなく、類概念を象徴する間接性とともに、指定のひろがりや厚さを手に入れることになる。

(3) 音声はついに目のまえに対象をみていなくても、意識として自発的に指示表出ができるようになる段階である。たとえば、狩猟人が獲物をみつけたとき発する有節音声が、音声体験としてつまかさねられ、ついに獲物を眼のまえにみていないと



第2図

きでも、特定の有節音声が自発的に表出され、それにとまなつて獲物の概念がおもいかべられる段階である。(第2図参照)

ここで有節音声は、はじめて言語としてのすべての最小条件をもつことになる。(二一九―三三頁)

このように三段階の進化過程を整理し、「(3)の段階はどのように可能になるのだろうか」と問う。

吉本によれば、「エンゲルスの『相互に何事かを言わなくてはならぬまでになった』という漠然としたことば、そのままでは解答とはならない」ということになる。また「ランガーは感情的な体験が抽出されて言語をつくってゆく過程をしめし、オグデン＝リチャーズはたんに場にたいする反射であった音声の有節化され、それが象徴としての機能を獲取する過程をあきらかにしている」と評価する一方、「この外化過程がとりもなおさず未明の人類の意識にとって、それを強固にし意識的な体験として脳髓や神経系の構造をととのえてゆく過程であることをはっきりとしめしていない」と批判する。

エンゲルスについては「はじめに労働が、つづいて言語が、(本質的な衝動)によって、猿の脳髓からすべての相似点でそれよりはるかに大きく、はるかに完全な人間の脳髓にしたいにうつってゆき、それにつれて感覚機関が発達してきた、とのべている」と一面の仕事を認め、「しかしこの(本質的な衝動)とよんだものが、人間の意識の自己表出 (Selbstausdrückung) であることをはっきりとしめしえなかった」と批判する。エンゲルスの抱えた問題は、さらに次のように抉られる。

意識の自己表出としてかんがえられるべきものを(本質的な



衝動」というあいまいな言葉でしかしめしえなかつたため、器官的・生理的な次元の発達（これは労働の発達にもなう、自然としての人間存在の発達である）と、意識の次元の強化・発達（これは意識の自己表出性の発達にもなう自己を対象化する能力の発達である）とを区別してあつかうべき言語問題を、大脳生理的機能（いわゆる第二信号系）と言語の本質とを（したがって言語、文学、芸術と労働とを）そのまま短絡させる理論をおびぎだした。（三三三頁）

吉本は、「現実的な反射が自己表出としてはじまるや否や、音声は意識に反作用をおよぼし心的な構造を強化していった」ことを重く見て、次のように論を進める。

あるところまで意識は強い構造をもつようになったとき、現実的な対象にたいする反射なしに、自発的に有節音声を発することができるようになり、それによって逆に対象の像を指示できるようになる。このようにして有節音声は言語としての条件をすべて具えるにいたるのである。有節音声は言語化されていく過程は、人間の意識がその本質力のみちをひらかれる過程に外ならない、といえる。

有節音声は自己表出として発せられるようになったとき、いかえれば言語としての条件をもつようになったとき、言語は現実的な対象との一義的(eindeutig)な関係をもたなくなつた。たとえば、原始人が海をみて、自己表出として「海」といったとき、「へう」という有節音声は、いま眼のまえにみている海であるとともに、また他のどこかの海をも類概念として抽出していることになる。そのために、ほんたいに眼の前にある海

は「海」ということばでは具体的にとらえつくせなくなり、ひろびろとしているさまを「海」なら「へうのはら」といわざるをえなくなつた。これは「蒼き海」の原といつても、もっと具体化して「蒼き海」の原といつても、眼のまえの海のすべてをつくすことができないのである。この過程をどれだけふんでも、視覚にうつる眼のまえの海のすべてを言語はまるごとあらわすことができない。

しかし、自己表出性をもつことによって有節音声はべつの特長をも獲取した。海を眼のまえにおいて「海」という有節音声を発しても、また、住居の洞穴にいながら「海」という有節音声を発しても、おなじように、現実にくつもある海を類概念として包括することができることであつた。これは、音声は現実にたいする反射的音声という視覚的反映との一義的な結びつきを徐々にながい時間をかけてはなれてゆく過程で、手にいれた特性であつた。

有節音声は自己表出されたときに現実的な対象との一義的な結びつきをはなれ言語としての条件を完備した。表出された有節音声はある水準の類概念をあらわすとともに、自己表出はつみかさねられて意識の構造をつよめ、それはまた逆に類概念のうえにまたちがつた類概念をうみだすことができるようになる。おそろく長い年月のあいだこの過程はつづくのである。（三三四頁）

続いて吉本はS・I・ハヤカワの『思考と行動における言語』のなかの、「言語の抽象の過程」の考察を取り上げ、「ユーズィブスキの言語の抽象段階のはしご（ビュール・ギロー『意味論』）に及び、それらの違いに言及したうえで、「ハヤカワやユ

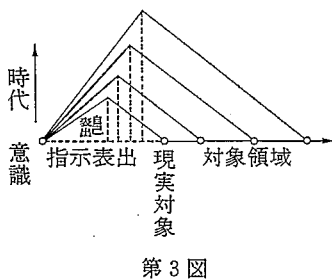
「ズイブスキイの抽象段階は、いわば言語のもつ特性をしるための便覧の役目をおっている」とし、「なぜ人間は牝牛を「牝牛」という言葉（名称）で呼ぶようになったか」と問うて、次のように言う。

人間が、じぶんを「人間」として意識の対象としうるようになったことと、人間が実在の牝牛を、「牝牛」という名称でよびうるようになったこととは、別のことではない。人間が、まだじぶんを個体としてしか自己意識の対象としえなかったとき、牝牛は、人間にとって視覚的な存在であつても、「牝牛」という言葉で呼ぶべき術をもたなかった。それは、あるとき、ある場所であつたある種の動物であり、つぎのとき、つぎの場所であつたおなじ種の動物との関連は、自己意識のなかに存在しなかつたのである。そこでは「牝牛」という名辞は存在しえなかつた。言語が知覚とも実在とも異なつた次元に属するのは、人間の自己意識が、自然意識とも知覚的意識とも対象的になつた次元に属しうることの証左にはかならない。このようにして、言語は、ふつうのと리카わされるコトバであるとともに、人間が対象的な世界に關係する意識の本質である。この關係の仕方なかに言語段階の現存性と歴史性の結び目があらわれる。(三六〇—三七頁)

そして「この關係から、ある時代または社会の段階によって、言語の自己表出と指示表出とがあるひとつの水準をおびるように拡張しているさまを想定しうる」として次のように認る。

ある時代の社会の言語水準は、ふたつの面からかんがえられ

る。言語は自己表出性において、わたしたちの意識の構造にある強さをあたえるから、各時代がもっている意識構造は言語が発生した時代からの急げきなまたゆるやかな累積そのものにはかならず、また、逆にある時代の言語は、意識の自己表出のみかさなりをふくんでそれぞれの時代を生きているのである。しかし、指示表出としての言語は、あきらかにその時代の社会、生産体系、人間の諸關係そこからうみだされる幻想によって規定されるし、強いていえば、言語を表出する個々の人間の幼児から死までの個々の環境によつても決定的に影響される。また異なつたニュアンスをもっている。このようにして言語の本質にまつわる永続性と時代性、または類としての同一性と個性としての差別性は、言語の本質の対自と対他の側面としてあらわれる。言語の表現である文学作品のなかにわたしたちがみるものは、ある時代に生きたある作者の生存とともにつかまえられて、死とともに亡んでしまう何かと、人類の発生とともに累積されてきた何かの両面であり、本質としては、作者が優れているか凡庸であるかにかかわらないのである。(三七—三八頁)



第 3 図

吉本はこの節の最後で、「言語が発生のときから各時代をへて転移する水準の変化ともいうべきもの」を想定している。前の第3図に説明を施しながら言う。

言語は社会の発展とともに自己表出と指示表出をゆるやかにつよくし、それとともに対象の類概念のほんいはしだいにひろがってゆく。ここで、現実対象ということばは、まったく便宜的なもので、實在の事物にかぎらず行動、事件、感情など言語にとって対象的をすべてをさしている。このような想定からは、いくつものもんだいをひきだすことができる。

ある時代の言語は、どんな言語でも発生当初からの累積である。これが言語は保守的であるということの意味にほかならない。このような累積は、ある時代の人間の意識が、意識発生するときからの累積された強度をもつことと対応する。

もちろん、ある時代の個々の人間は、それぞれがった意識体験と強さをもっており、天才もいれば白痴もいる。それにもかかわらずある時代の人間は、意識発生いらいのその時代の意識水準を、その存在のはじめに生まれたときに約束されている。これとは反対に、言語はおびただしい時代的な変化をこうむる。このような変化はその時代の社会の多様な関係、そのなかでの個別的な環境と個別的な意識性と対応している。この意味で、言語は、ある時代の個別的な人間の生存とともに始まり、死とともに消滅し、またある時代の社会の構造とともに生存し死滅する側面をもっている。これが言語の対他的な側面にはかならない。(三九〜四〇頁)

以上「進化の特性」に関して学んで来た。

### 三 3 音韻・韻律・品詞」より、「音韻・韻律」を学ぶ

吉本はここでカッシラの三段階論に戻り、言語条件が完成するまでの経路が確認されるされないに問わず、「特定の音の組合せが、特定の対象にむすびつき、その象徴としてあらわれたことは、たれも否定することはできない」と言う。『言語にとって美とはなにか』の序に於いて「文学は言語でつくった芸術だといえど」「たれも認めるに違いない」と言い、「これが文学についてたれも認めるただひとつのことだ」とも言っているが、このように「普遍的に語る」立場に身を置いて原理的に探求されると、分かりやすい。

「この過程」は、一人一人の声の質が異なる現実の中から、「個別的な音の響きをききわけて個別的なちがいをみとめるとともに、抽出された音声の共通性を認知できるようになったことを意味している」と指摘するところは、これまで我々が学んで来たことを、「言葉とは」という観点に立って抽象したものとして説得力がある。

吉本は「有節音声の抽出された共通性」を「音韻」と名付ける。そして「有節音声が音韻として認められたことは、器官としての音声、意識の自己表出としての音声に高められたことに対応しており、これによりはじめて指示性を獲取した」と言い、三浦つとむの『日本語はどういう言語か』の「音韻は、表現上の社会的約束に結びついている音の一般的な面であり一族であるという云いかたでさしているもの」に対応していると言う。

次に時枝誠記の『国語学原論』を取り上げ、「韻律の本質についてわたしのしっているかぎりほとんど唯一のまとまった見解」と評価して次の引用をする。

私の今の問題は、言語に於けるリズムの本質如何の問題である。リズムを内的発動性に求めることは、リズムの心理的側面の研究であり、又リズムの形式を調査することは、リズムの客観的側面を研究することであつて、未だリズムの具体的経験そのもの、言語に於けるリズムの本質を明らかにしたものではない。私はリズムの本質を言語に於ける場面であると考へた。しかも私はリズムを言語に於ける最も源本的な場面であると考へたのである。源本的とは、言語はこのリズムの場面に於いての実現を外にして実現すべき場所を見出すことが出来ないといふことである。宛もそれは音楽に於ける音階、絵画に於ける構図の如きものである。かく考へて来る時、音声の表出があつて、そこにリズムが成立するのでなく、リズムの場面があつて、音声表出されるといふことになる。音声の連鎖は、必然的にリズムによつて制約されて成立するのである。(四二頁)

更に吉本は三浦つとむの「詩や歌のリズムが言語の意味や対象と直接つながりをもたないことから、これを形式的な創造とかがえるべきものではなく、作者の思想が一面では本来の言語表現として、一面では感性的な表現として二重性をもってあらわれたものと理解すべきだ」というかんがえを紹介し、時枝説との共通点を、「言語の韻律が意味のような機能と直接かかわりのない特性であることを指摘している点」とし、興味ぶかいけれども満足できないと批判し、自説を次のように展開する。

わたしたちは、原始人が祭式において、手拍子をうち、打楽器を鳴らし、叫び声の拍子をうつ場面を、音声反射が言語化する途中にかんがえてみた。このような音声反応が有節化された

ところで、自己表出の方向に抽出された共通性をかんがえれば音韻となるだろうが、このばあい有節音声は現実的対象への指示性の方向に抽出された共通性をかんがえれば言語の韻律の概念をみちびくことができるようにおもわれる。だから言語の音韻はそのなかに自己表出以前の自己表出をはらんでいるように、言語の韻律は、指示表出以前の指示表出をはらんでいる。

対象との直接の指示相关性をうしなつてはじめて有節音声は言語となつたため、わたしたちが現在にかんがえるかぎりの韻律は言語の意味とかかわりをもたないにもかかわらず、詩歌のばあいのように指示機能をつよめるのはそのためだとおもわれる。リズムが言語の意味とかかわりを直接もたないにもかかわらず、指示の抽出された共通性とかんがえられることは、言語がその条件の底辺に、非言語時代の感覚的母斑をもっていることを意味している。これは等時的な拍音である日本語では音数律としてあらわれる。(四三―四四頁)

この後吉本は一つの仮定の下に、「わたしたちは、カッシラアにならつて、言語の世界でもっとも簡単な構造は、常識的にかんがえられるように単語ではなく、むしろ文章だといふことができるかもしれない」とも付け加え、時枝理論の「詞と辞」に着目し、吉本理論の「自己表出・指示表出」の観点から、助動詞・助詞・名詞・代名詞・動詞・形容詞・副詞・の順に解説を加えている。そしてカッシラアの『言語』のつぎの部分を用用する。

自我感情は言語構成の過程に於て根本的意義を有するにも拘はらず、それに対して独立的な言語的表現が与へられるためにはフンボルトも指摘したやうに相当困難な事情が存すると云ふ

ことを見逃すことができない。何となれば自我の本質は主観である云ふところに存するのにも、一方に於て思考乃至言語過程に於ては凡ゆる概念が思考する主観、言語する主観に対して一つの客観でなければならぬからである。この矛盾を克服するために言語はその初期に於ては主観たる自我を客観たる対象的概念のうちに表現する。その最も著しい例証として人称代名詞が初め所有格的代名詞として発生すると云ふ事実を挙げることができる。所有の概念がこの意味に於て主観との媒介的位置にあることは見易きところである。(五二―五三頁)

そうして、「カッシラアにしたがえば、自分が所有した女性を『妹』と表現するまでと、『妹』を我が得しものとかんがえそれを代名詞化しうるまでには段階があることになる」と言う。

ここまで来て漸く記述されて残された文献上の言葉に遭遇する。吉本はたまたま「妹」を取り上げていた。勿論『万葉集』歌を資料として用いたためだ。しかしここまで学んで来ただけでも、現在に至って尚暢氣に古代文学研究を続けている自分の姿が浮き彫りにされる。

#### 四 第二章 「言語の属性」の中から「意味」「価値」「像」を学ぶ

吉本の理論で我々が注目すべきは、言語論が「像」に及んで「文学」に至るところである。これは言語学者には絶対に書き得ないところだと私は思う。それが「言語の像を駆使した経験」の所以である。恐らくこの原理を無視しては「文学論」は成り立たないのに違いない。私はそう思う。

ところで吉本は言語の属性として「意味」をどう規定しているのであろうか。ここで吉本は三浦つとむや時枝誠記、それにS・I・ハヤカワの考え方を批判的に捉え、次のように言う。

言語の本質は、どのようなものであれ、自己表出と指示表出とをふくむものとかんがえればこれらの矛盾をなくすることができ。言語の意味とはなにか、をかんがえるばあい、頼りになるのは言語の本質だけである。そして、わたしならばつぎのように言語の意味を定義する。言語の意味とは意識の指示表出からみられた言語構造の全体の関係である。(七〇頁)

しかも有り難いことに短歌の解釈に関して三浦つとむの意味概念の限界に迫って、「古典詩」が「幼稚な無内容」にしか解釈されないことに触れ、その理由を「自己表出性をまったく考慮しない意味を考えている」からだという。それではどうすればいいのか。吉本は「言語の意味をかんがえることは、指示性としての言語の客観的な関係をたどることにはちがいないのだが」「指示表出の関係をたどりながら、必然的に自己表出性をもふくめた言語構造の関係をたどることになる」という。そうして「おこりうべき誤解は、ふた種類ある」としてつぎのように記す。

ひとつは、このへよみ人知らずのうたが、かならずしも眼前に春日野の霞のなかに咲く桜の花を視ながら唱われたとはかぎらず、記憶のなかの印象の風景であるかもしれず、極端なばあいには、過去の詠唱によってつみかさねられた言葉をつかって創られた修辭的な歌作にすぎないかもしれない、ということである。しかしそれにもかかわらず、意味は、観念の指示す

る運動として、おなじように理解すればよいのである。

もうひとつは、げんみつにいえば、人間的意識の表出という概念は、言語概念であっても、げんみつには、言語概念の範囲をでられないが、このへよみ人知らずの歌、一般には文学芸術は表現であり、したがって表出という概念は、表出と表現という二重の分化としてかんがえるべきではないかということである。そして、たしかに、文学芸術の表現は、狭い意味での表出 (Ausdrückung) ではなく、この二重分化としての表出 (Produzieren) という概念なしには、かんがえることはできない。しかし、わたしたちは、ここでは対象的な意識として言語を組上にのぼせているのである。言語表現としての表出は、げんみつにいえば、文学の成立によって、はじめて成立する。文学の成立によって、表出は、表出と表現とに分化するのだが、この本質は、けつしてちがったものではないことを、後にとりあげることができるだろう。(七一頁)

この指摘は「文学」と言えばすぐに「事実」に還元してしまう在り様を鋭く抉って意味がある。

吉本はさらに「意味概念の微妙なちがいを捉え、「言語の本質からは指示表出としてみた表現の全体の関係を意味としなければならぬ」と指摘し、次のように言う。

言語の指示表出性は、人間の意識が視覚的反映をつとに反射音声として指示したときから、他と交通し、合図し、指示するものときまってきた。言語の意味は、意識のこのような特性のなかに発生の根源をもっている。言語を媒介として世界をかんがえるかぎり、わたしたちは意味によって現実と関係し、たたかい、

他との関係にはいり、たえずこの側面で、変化し、時代の情況のなかにいる、ということが出来る。(七三頁)

それでは「言語の価値」とは何なのか。吉本はピエール・ギローの『文体論』やソシュールの『言語学原論』を検討しながら次のように定義する。

言語の価値とは何か、と問われたら、ただつぎのようにこたえればよい。意識の自己表出からみられた言語構造の全体の関係を価値とよぶ。(八一頁)

この考えはサルトル(『存在と無』)の「さらに価値は、その存在において、『欠如を蒙るる全体』であり、個々の存在はそれへ向かって自己を存在させる。価値は、一つの存在にとつて、この存在がまったくの偶然性として『あるところのものである』かぎりにおいてでなく、この存在が自己自身の無化の根拠であるかぎりにおいて、出現する。その意味で、価値は、この存在が存在するかぎりにおいてでなく、この存在が自己を根拠づけるかぎりにおいて、この存在につきまとう。要するに、価値は『自由』につきまとう」と指摘する「欠如を蒙るる全体」に当たると言い、次のように述べる。

各時代とともに連続的に転化する自己表出のなから、おびただしく変化し、断続し、ゆれうごく現在のな社会と言語の指示性とのたたかひをみているとき、価値をみているのである。そして、言語にとつての美である文学が、マルクスのいうように「人間の本質力が対象的に展開された富」のひとつとして、

かんがえられるものとすれば、言語の表現はわたしたちの本質力が現在の社会とたたかいたが創りあげている成果、または、たたかわれたあとに残されたものである。(八六頁)

続いて吉本は文字論に至り、福田恆存の『私の国語教室』を批判的に踏まえ、「文字の成立によってほんとうの意味で、表出は、意識の表出と表現とに分離する。あるいは、表出過程が、表出と表現との二重の過程をもつといってもよい。言語は意識の表出であるが、言語表現が意識に還元できない要素は、文字によって始めて完全な意味でうまれるのである。文字にかかれることによって言語表出は、対象化された自己像が、自己の内ばかりではなく外に自己と対話するという二重の要素が可能となる。」と指摘し、「書き言葉は、「は」言語の自己表出につかえるほうにすすみ、語り言葉は指示表出につかえるほうにすすむ」と指摘する。そうして「言語表記の性格にとって最後のもんだいであり、また言語の美にとって最初のもんだい」として、「像」の問題を取り上げる。

吉本の言語学者との違いは、「言語が意味や音のほかに像をもつ」ことを認めるところにある。吉本は「像」と「意味」の違いを「あたかも事物の〈概念〉と、事物の〈象徴〉とがちがうのとおなじようなものである」と指摘し、「言語は、その発生の初期に、視覚的反映に対する反射的な音声という性格をすてしまった」「音声」が自己表出を手にいれたためである。これによって言語本質は、指示表出と自己表出とのないまぜられた構造となった」と言う。こうした指摘は言語学者のかかわれる分野にはない。「像は、人間が対象を知覚しているときには不可能な意識である

ことは」サルトルの言うとおりと指摘する所は、まさに芸術論としてしか言及できないところであろう。

吉本隆明はこの後カント、サルトルの考え方を引き、次のように言う。

言語における像は、もちろん言語の指示表出が自己表出力によって対象の構造までも指示する強さをあたえられ、そのかわりに自己表出によって知覚的な次元からははるかに、離脱させられてしまった状態で、はじめてあらわれる。言語における像がなぜ可能となるか、を社会的な要因へまで潜在的にくぐってゆけば、意識に自己表出をうながした社会的幻想の關係と、指示表出をうながした生産的関係とが矛盾を来たした、樂園喪失のさいしょまでかいくぐることができる。(九六―九七頁)

私は『言語にとって美とはなにか』よりこうした考えを学んだ。どこまで咀嚼しているか分からないが、文学を考えるものにとつて非常に大切なものだと思う。

##### 五 古代文学研究への手掛かり

吉本の「発生の機構」が証明することが困難な世界に属することは吉本自身が触れている。しかしこの中で言われていることは学問に携わろうとするものにとって、小さいものではない。それは知ることへの飽くこと無き探求心と真実への探求心なのだと思う。

西洋渡来の科学的方法が解禁になって、人間一人一人の価値が公然と認められ出したことと相俟って、文学のテーマがまるで一新されることになる明治以来、文学研究の世界に於いて、吉本の

方法は採用されなかつた。先進諸国の学問に習うこと、追いつくことを第一義に考えた状況ではそれもやむを得なかつたかもしれない。そうした欧米中心の考え方に対して、当然のごとく起こつて来た日本人自身への関心とそれを解明しようとする方法としての、民俗学的方法さえも、吉本に対しては決定的な影響を与えはしたものの、十分満足させることが出来なかつた。それは欧米中心主義者の方法に対して起こつた方法として、逆に欧米の方法の学問的多様性を重視出来なかつた所に起因することのようになつたしには思える。吉本の方法はそれを重視し、権威主義の横行する世界で全く自由に、自らの問題にとことん固執した所に成立した希有の方法であつたということが出来よう。客観的に問うということは言うには易い。

歌に関わつて言えば、明治以来の方向を決定したもう一人の人間を挙げることが出来る。それは歌作りに於ける正岡子規である。彼は伝統的な日本文化の中に生を受け、欧米の学問の成果に学びながら、明治という新しい時代の新しい表現原理を、『古今集』と紀貫之を批判することで打ち立てることに成功した。『再び歌よみに與ふる書』の齎した意味は小さくはない。子規の言語表現の足跡を辿ってみると、漢詩・俳句・短歌・小説・隨筆とあらゆる分野に亘っているが、出発は伝統的な漢詩・俳句・短歌の類であり、ホトトギスを巡つて彼が残した文献は、彼が言語表現をどのように考えていたかを語つて興味ぶかい。

彼は『松蘿玉液』（明治二十九年八月一日）に「われ故郷にありし頃時鳥の声聞きたる事なし」と断つて、「それでなくと／それにして置け／時鳥」と吟じながら、明治十一年には「聞子規」と題し、「一声孤月下／啼血不堪聞／半夜空欹枕／古郷万里雲」

という五言絶句を作つていた。ここから言えることは、子規にとっては「聞子規」的な方法として、漢詩作りの作法に則れば幾らでも言葉を経ることが可能であつた世界から、伝統的な景物であるとは言え、今鳴いていることによって引き起こされた興に基づいて言葉を継ぐ世界へと確実にその領域を広げて行つていくことだ。「矚目」として捉えれば伝統に属することと言えなくもない。

幼少のころから絵を好み、芭蕉以上に蕪村に傾倒し、「日本では昔から写生といふ事を甚だおろそかに見て居つたために、畫の發達を妨げ、又文章も歌も総ての事が皆な進歩しなかつたのである。それが習慣となつて今日でもまだ写生の味を知らない人が十中八九である」（『病床六尺』四十五頁）と彼の方法の意義を述べている子規の「ホトトギス」は、例え伝統という累積の根拠付けに負う物であつても、「写生」が「天然を写す」こととして方法的に自覚されたものであるとき、伝統からはみ出していると言わざるを得まい。それに『六たび歌よみに與ふる書』に言う「外国の文学思想は続々輸入して日本文学の城壁を固めたく存じ候。生は和歌に就きても旧思想を破壊して新思想を注文するの考にて隨つて用語は雅語俗語漢語洋語必要次第用うる積りに候」を合わせ、歌は雅を歌うものという伝統に根差す存じ候に對して、全く新しい方法を提示したのだと考える。子規以後、歌は原則としてその方向に歩むことになつた。これは『作歌の原理』として画期的であつた。

今我々は、言語の發生を学び、言語が何によつて支えられるかに思いを馳せることができる。吉本が「ある時代の社会の言語水準」に言及しているところと、子規の「用語は雅語俗語漢語洋語必要次第用うる積り」として意識したところを考えると、子規の場合、「個性としての差別性」を求めて、外国の思想を取り



入れて生まれ来る新時代の新しい感情を、あらゆる用語に負うことによつて、披瀝せんとする極めて近代的な方法であつたことが理解できる。そしてこの後略百年に渡り、この考えは基本的に作歌の原理の一つとして厳然たる位置を保っているのである。子規の主張は伝統的な作歌方法に對して、時代の主張として在り得べきものであつた。ところが問題は分野を異にするところで起つていた。

子規の方法はあくまで作歌の方法であつた。ところが、子規の影響下にあつた多くの研究者は、歌の研究にまでその方法を拡大してしまつた。言葉は元々人々の関係の中に在つた。ところが子規の発想に準じて考えると言葉は歌の歌い手の自由に任されることになる。そうして「個性としての差別性」を探求することに重きが置かれるようになると、歌の価値はそこにこそ存在すると考へるようになる。そして疑うこともなく、歌が基本的にそうであるものと思ひ込み、「個性としての差別性」を追及することが近代的なことであることを忘れ、古代の歌についてもその存在を捜し續けて現在に至つたのである。これでは時代を無視したことになる、日本では「近代」が既に古代に存在したことになる。問題の最も大事なものの一つはここに在ると思われる。

おわりに

学ぶべきことはまだまだたくさんある。例えば第三章の短歌に関するすべて、第V章構成論の「第一部 詩」のすべて等である。しかしながらその全てに触れることはとてもできない。幸いこれまで取り上げて来たところにも、我々の問題にすべきことに対するヒントが幾つも包含されていたように思われる。

吉本の考え方に、正確に言えば（第二の刷り込み）を経験した

者も、『万葉集』から古代文学研究に入り、先学の研究成果に見えるなかで、少なからぬ揺れをも体験した。考えてみれば第一の刷り込みは基本的に近代の価値観であつたはずだし、特に戦後の価値観だったので、吉本のようなものは存在しなかつたのだから、底辺で、共通の価値観として（個性の存在確認こそ探求の目的）とされるような研究成果に遭遇し続けたら揺れるのが当たり前でもあつた。その揺れの中で「相聞歌」の多さに拘つて来た。そしてそこにこそ文学の起りがあるのではと考へて来た。理屈はこうである。人間が言葉を持つことで自然から分離し、意識の生活に入ったとき、異性をも対象化しなかつたか。したとすれば人間はそれをどのように克服して、人類史を永らえて来たのか。強姦を基としたとするならば、それは人類史ではない。言葉は特に異性にのみ関るものではない。それなのに言葉を持ってしか関れないとしたら、人間はその名において、何かをしたのではないか。言葉一般の中に、異性に関する方法を考案した。その一つが言葉一般とは異なつたリズムのある言葉だつたのではなかつたかと。人間の死を巡る歌に關しても、なぜ言葉によらなければならなかつたか。それを死にからめて掴めそうに思へた。しかしながら吉本は既にそうした具体的なものからの考察の限界を指摘していた。今正に現象面に固執し「相聞歌から見れば」とか、「死に關わる歌から見れば」とかの個別的なことに付き過ぎたことがよく見える。文学の感情起源説の不合理性を越えて信仰起源説を唱へた折口信夫の考えさえ相対化されかねない。それはやっぱり信仰だからだ。

それでは止まるべきか。私はそうは思わない。学問とは試行錯誤の繰り返しであつてよいと考えるからだ。真実に近づくことが目的なのだから。

確かだと思えたことがそうでもなかったと知ることは厳しいことである。しかし確かでないものを確かだと思い込んでいることはつまらないことなのに違いない。様々なことを考えてみればよい。そうして一番確かなところに達すればよい。それはだれの力であってもよいのだ。

注

- (1) 今道友信は「美について」の中で、この言葉の史的後づけをしている。それによると元々は農用語であったらしく、果樹を絞り出すと言う意味から文学用語に用いられたようで、ゲーテのころを境にして、人間の内面を表す意味に用いられたようである。
- (2) 当然「人性」行為」も具体的な例の一つに挙げられている。
- (3) この「累積」という言葉に着目するとき、言葉が自由に使える

ということの意味を、もう一度考え直す必要があると思う。

(4) 『子規全集』一一卷三七―三八頁。

(5) 『子規全集』八卷一六頁。

(6) 『子規全集』八卷三六三頁。「時鳥」に対して『新體詩』冒頭では「カックー」と訓を施しているので今日に言う郭公を指しているとも取れるが、「ある時晝過ぎなりけんキヨキヨといふ声聞えて」と記しているのと、右の句の訓として「カックー」では合わず、「ホトトギス」としか訓みえない。

(7) 『子規全集』七卷二三頁。

(8) 『子規全集』七卷三七頁。

※ 吉本がその著書三七―三八頁でいう「作者が優れているか凡庸であるかにかかわらない」という所も、印象批評の克服という観点で注目したい。